

2021 年降誕節第七主日礼拝説教「神のものは神に」
ルカによる福音書第 20 章 19 節から 26 節

【聖書】

ルカによる福音書 20:19 そのとき、律法学者たちや祭司長たちは、イエスが自分たちに当てつけてこのたとえを話されたと気づいたので、イエスに手を下そうとしたが、民衆を恐れた。20 そこで、機会をねらっていた彼らは、正しい人を装う回し者を遣わし、イエスの言葉じりをとらえ、総督の支配と権力にイエスを渡そうとした。21 回し者らはイエスに尋ねた。「先生、わたしたちは、あなたがおっしゃることも、教えてくださることも正しく、また、えこひいきなしに、真理に基づいて神の道を教えておられることを知っています。22 ところで、わたしたちが皇帝に税金を納めるのは、律法に適っているでしょうか、適っていないでしょうか。」

23 イエスは彼らのたくらみを見抜いて言われた。24 「デナリオン銀貨を見せなさい。そこには、だれの肖像と銘があるか。」彼らが「皇帝のものです」と言うと、25 イエスは言われた。「それならば、皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい。」26 彼らは民衆の前でイエスの言葉じりをとらえることができず、その答えに驚いて黙ってしまった。

1 偽善者なる回し者達の罠

三年以上、礼拝で一緒に聴いてきたルカ福音書も、主イエスのエルサレムでの最後の数日を迎えています。主はエルサレム神殿でのびのびと自由に振る舞っておられるようです。祭司長の許可のもと神殿の境内で商売をしていた商売人達を追い払い、民衆に神様のことを教え、律法学者よりも高い人気を博していました。祭司長や律法学者達にとって、イエス様は自分たちの権威を揺るがす危険人物でした。彼らは、主を罠にはめ、ローマ総督に渡して反逆者として殺させようと策略を練ります。私たちは、自分たちの権威や利益を守ろうとする時、人を騙し陥れる事さえやりかねない、恐ろしい事ですが、それが私たち人間の現実。人間はよくもなれば、悪くもなるという事だと思えます。

敵を落とし入れようとする時、人間は、ありのままの自分をさらけ出す事はせず、自分を装います。今日の話しでも、律法学者や祭司長達が主イエスによこしたのは、「正しい人を装う回し者」とあります。この「装う」とは、「仮面をつけて芝居をする」という意味があり、神さまの前で正しい人の仮面をかぶり芝居をする、ということから「偽善を行う」と訳せる言葉です。そして、「回し者」と訳されている言葉には、「スパイ」という意味があります。神を欺く者は、スパイのように人を欺く事も平気でやってのけるようになるのか、人を欺いていると、神のみ前でも仮面を脱げなくなるのか、おそらく両方なのでしょう。人間は、神にも人にも同じような態度を取る者だと思えます。

そんなスパイ達が主イエスに話しかけます。21節「先生、わたしたちは、あなたがおっしゃることも、教えてくださることも正しく、また、えこひいきなしに、真理に基づいて神の道を教えておられることを知っています。」勿論、スパイ達は、心からそう思っているわけではなく、お世辞を言ってイエス様をいい気分にさせておいて、不意打ちを食わせよう、というのが狙いです。「えこひいきなしに」と訳されている部分は、「人の顔色を窺わない」と訳せる言葉です。主イエスは、人の権威に忖度する事なく、ただ神の権威、真理に基づいてのみ語り行動される、主が教えてくださる事に、行われる事に、真理に基づいた神の教えがあると、偽り者である彼らが、はからずも真実を言い表したのです。なんとも皮肉なことです。

しかし、スパイ達はその事には気づかず、満を持して主イエスの息の根を止めるべく考え抜いた問いを投げかけます。「ところで、わたしたちが皇帝に税金を納めるのは、律法に適っているでしょうか、適っていないでしょうか。」当時のユダヤは、ローマ帝国の植民地であり、ユダヤの人々は、ローマ帝国に人頭税など様々な税金を支払っていた事は何度か申し上げました。そのような状況下で、「神以外に支配されてはならない神の民が、神を知らない汚れたローマ人に税金を納める事は、果たして神の御旨に適っているのだろうか」多くのユダヤ人がそのような疑問を持つのも無理からぬ事でした。実際、紀元後6年、ガリラヤ出身のユダという男が、「神の民が、ローマ帝国に税金を納める必要などない」と武装蜂起し反乱を起こしたと、ヨセフスという歴史家が記しています。ローマ帝国も、ユダヤの人々が納税を拒否する事に、神経質になっていました。このような状況下での皇帝への納税についての問いかけは、政治的な色合いを帯びた危険な問いかけであり、主イエスがどう答えようと窮地に立たざるを得ないというとても巧妙な罠でした。主が「皇帝に税金を納める事は律法に適っている」と言えば、民衆の反発を呼び起こすのは避けられません。逆に「律法にかなっていない」と言えば、ローマ帝国に反乱を企てたとして、総督に引き渡される口実となります。主イエスはピンチに立たされました。

しかし、主イエスはこの危機を鮮やかに切り抜けられます。「『デナリオン銀貨を見せなさい。そこには、だれの肖像と銘があるか。』彼らが『皇帝のものです』と言うと、イエスは言われた。『それならば、皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい。』」福音書の読者は、ここで胸のすくような思いがして、喝采を叫ぶでしょう。私達もそう。さすがイエス様、こんな答えができるなんて、やはり神の御子だけはある！と。

2 皇帝のものは皇帝に

しかし、疑問も湧きます。主イエスのご自身でデナリオン銀貨を出すのではなく、わざわざ回し者達に銀貨を出させて、敢えてそこに刻まれた肖像と銘を聞くという、まわりくどい事をなさっています。どうしてこんな事をしたのでしょうか。

当時のローマ帝国の通貨であるデナリオン銀貨には、皇帝ティベリウスの肖像と、「神に列せられるアウグストゥスの子、ティベリウス」という銘が彫ってあったそうです。回し者達もその銀貨を持ち歩いていました、それで税を納め、生活に必要な物を買っていたから。つまり、彼らも、又、デナリオン銀貨が流通する、ローマ帝国の武力が支える社会秩序の中に生きていた、生かされていたのです。この事を主は、スパイ達に示したかったのではないのでしょうか。つまり、主が「**皇帝のものは皇帝に返しなさい**」と言われたのは、「あなたがたは、その銀貨で生活している。つまり、ローマ支配の社会の中で生かされているのだから、その社会に対する責任を果たしなさい」という事だと思えます。これを見聞きしていた民衆達も、自分たちのポケットからデナリオン銀貨を取り出して眺め、この社会に生かされている者としての自覚を持ったかもしれません。

現代を生きる私たちも同じだと思います。私たちはイエス・キリストへの信仰を与えられ、世の教えではなくキリストの教えに生きる者達とされましたが、砂漠の中で一人で生きているわけではありません。この社会の中で生かされ、様々な支えを受けて生活しています。ですから、社会の一員としての責任も出てきます。納税もその一つ。そして、社会の一員としての責任は、生きている時代や社会の状況で異なります。2000年前の古代世界と現代世界では世界のありようも、社会の仕組みも全く異なるのですから、果たすべき責任も変わってきて当然です。今日の日本は、主権在民の民主主義国家です。政治家が主権者ではなく、彼らは主権者である国民の代表です。ですから、有権者である私たちが政治を学び意見を言い、権力の暴走を監視し、選挙できちんと考えて投票する事は、社会に対しての責任を果たす事となります。

3 神のものは神に返しなさい。

しかし、主の言葉はそれだけで終わりません。続けて「**神のものは神に返しなさい**」とおっしゃいます。寧ろ、この後半が重要です。ですが、一体、神のものとは、なんなののでしょうか。主は、先ほど、回し者達にデナリオン銀貨を出させ、そこに彫ってある肖像と銘が皇帝のものだと確認させてから、「**皇帝のものは皇帝に**」と仰います。つまり、皇帝の肖像と銘が刻まれているから、デナリオン銀貨は皇帝のものです。では、神が刻まれているものとは、なんなのでしょうか。

創世記1章にはこうあります。「**神はご自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。**」(創世記1:27) 神に似せて造られたものは、人間、神がどのようなお方かを映しているのは、人間だということです。創世記では、この全世界とそこにある全てのものは神が造られたと語ります、天地万物は神のもの。しかし、それら人間以外の被造物と人間の間には決定的な違いがあると聖書は語ります。それは、人間は、神に象って創造された神の似姿。ですが、その後、人間は罪を犯し神のみ前を去るしかありませんでした。しかし、それでも、私達が本来、神のものである事に変更はありません。ですから、私達は、神から自分自身という存在を委ねられて、

今を生きる者達なのです。それが、「神のものは神に返しなさい」という言葉の一つの意味だと思えます。

先ほど、自分たちの権威と利益を守る為にグルになって主イエスを落とし入れ滅ぼそうと謀る律法学者達や祭司長達、彼らの回し者達の姿をみました。しかし、そうすることで、彼らは、彼ら自身の深い所、根源的な所に刻まれた神の似姿を、自分で破壊しています。そうして、獣のように、自分の欲望に基づいて神と関係なく生き、神に返す事なく滅んでいくしかないのです。

しかし、それは、律法学者や祭司長達だけではありません。私たちも、人を陥れるまではしなくても、自分自身を神に似せて造られた者、神にお返しする者として、真実に大切に生きることができているのでしょうか。案外とできていないように思います。言うまでもなく、この世は、あらゆる所、あらゆる点で、人を判断したり評価します。学校の成績で、仕事の業績で、社会的な地位で、年収や容姿などなど。人間は高く評価されてこそ生きる価値がある、というのがこの世と言ってよいでしょう。私は四十年間、そんな世で生きてから、洗礼を受けクリスチャンとされました。クリスチャンとされる前と後で何が最も変わったかという、「私は無条件に生きていく価値のある人間なのだ」と、心底思えるようになった事です。仕事ができなくても、お金持ちでなくとも、優しくなくても、世間の人になんと言おうと、自分を愛してくださる主イエスがいらっしゃる！そう知って初めて、自分を主人として周りの評価を抛り所として生きる不安定な生き方から解放されました。そしてイエス・キリストという磐石な地盤の上に移されて安心して生きていけるようになりました。

しかし、神のものであるのは、自分だけではありません。全ての人が神のものであるという聖書の教えに生きる事は、自分を神のものとして生きる事より更に難しい事です。私たち、自分の配偶者や子供達、恋人や友人でさえ、神のものと思って接する事、なかなか難しい場合があります。時には八つ当たりなどしますし、不満や欲求のはけ口としてしまう事もあるかと思えます。家族など親しい人たちでさえ、そうなので、自分の敵にいたっては言わずもがな。しかし、自分の敵であろうとも、やはり神のもの、陥れたり損なったりしていい存在ではありません。ですが、自分の敵を、神のものとして大切にするなど、私達ができる業ではありません。全ての人を神のものとして大切にし神にささげ返す事、人間の力で出来ることではありません。

だからこそ、私達ができないからこそ、主イエスはこの世界に人間として生まれてくださり、最後は十字架について、全ての人間を神にささげ返せるようにして下さったのです。ある牧師が、「主の十字架には次のような祈りがある」として語っていました。「神よ、神のものとして自分自身を、自身の隣人を、あなたに返すことができない人々を赦してください、私に免じて赦してください。あなたのものであるよりも、自分を主人として闇の中を生きる者達を、私がもう一度あなたに結びつけます。あなたにお返しします。どうか受け取ってください。そして、この者たちを新しく生かしてください。

あなたの者として生かしてください。」私も主イエスの十字架には、そのような祈りがあったと思います。主は、徹底的に神に見捨てられるという十字架、人間が耐える事ができない絶望の十字架に架る事で、全ての人の罪をご自身で引受け、ご自身の贖いの血をもって、私達を神にささげられる者として清めてくださったから。その事がはっきりしたのは、十字架の死と葬りから三日後です。主が甦られたのです。神のものを神に返せない私たちの罪が、主の甦りの命によって打ち砕かれ、私達はきよめられ、神の者として生きる道が開かれました。ですから、主が三日目に甦られた、ということは、キリスト・イエスが、この人間の罪の世に勝利した事を意味しています。

4 この世と教会

ですが、私たち、目に見える現実の力、この世の力に心奪われて、キリストの輝かしい勝利を見失ってしまうことがあります。神の力よりもこの世の力が強いと考えるのです。教会も見失うことが度々でした。そうして、「**皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい。**」という主の言葉を誤解してしまいます。一つの誤解は「教会は、社会の権力者の問題には口を出さず、ただ信徒の心や魂の問題だけを考えればそれでいい」と解釈する事。そうして、教会はこの世の支配者達の庇護を受けて、彼らの統治に協力し発展してきたという歴史がヨーロッパにはあります。日本の戦時中の教会もそうでしょう。しかし、そのように世界には無関心で教会内の事のみを考えるやり方で、神のものを神に返したことになるのでしょうか。この世界に生きる人々もまた神のものであるでしょうに。

また、もう一つの誤解は、「キリストはこの世に勝っているのだから、この世は教会が治めて当然」というものです。かつて、教会はこのように考えこの世に権力を奮っていた事があります。しかし、その結果、教会の指導者達が自分の権力への欲望に呑みこまれてしまい、神から遠く離れてしまいました。そうして、教会の指導者達は、神のものである教会を、この世の権力、皇帝に返してしまうという過ちを犯したのです。

では、教会はどうしたらいいのでしょうか。この世界で「皇帝のものを皇帝に、神のものは神に返す」とはどのような事なのでしょう。成立したばかりの2000年前の教会が私たちに教えてくれます。できたばかりの教会とクリスチャン達は、ローマ帝国へ税金を納め続けました。その為、ユダヤの民族主義者達に殺された者も多かったです。やがて、ローマ帝国が教会に「ローマ皇帝を神として礼拝しろ」と迫る時代がやってきます。教会やクリスチャンの多くはこの要求を拒否しました。多くの者が逮捕され拷問され、無残な方法で虐殺されました。が、教会は武力で抵抗しようとはせず、ひたすら忍耐し、密かに礼拝を続けました。そして、そんな迫害の中でも、教会は社会的弱者である寡婦や孤児、捨て子を引き取って世話をしたそうです。2000年前の古代世界、人権意識など全くなかった世界で、迫害され弱く貧しい教会が、更に貧しく弱い人々を助け続けました。彼らは、この世を神のものとして、神にささげ返す気持ちで、

この世に奉仕していた、まさに主イエスがこの世で行われていた業を続けていました。彼らはイエス・キリストに倣っていたのです。

クリスチャン達を支えたのは、「この世に勝利した甦りの主イエス」の力です。だから迫害する者達に武力で抗う事もせずに耐えることができました。甦りの主イエスが、この世に勝利していないのであれば、神やキリストをこの世から守る為、教会は武装蜂起せねばならなかったでしょう。しかし、キリストは人間に守られるようなお方ではありません、この世に勝っているお方。そう確信できたから、彼らは力に訴えるような事をして、結局は神のものをこの世に捧げる結果に終わる、なんて事をせずに済みました。彼らを支えた「甦りの主イエスは、天の御神は、この世に勝っている」という確信は、神を神として礼拝し、主イエスを想起し続ける中で、彼らの心に根を張ります。そうして、初期の教会は、獸的な力が支配している古代世界に「世の光」として輝き、地の塩として働いたのです。

5 終わり

私達も、また、この古代の教会に学んでいきたいと切に願います。神を神として礼拝し、神の御言葉によってキリストに倣う者として造り変えられつつ、お互いを大切に思い合う、そうして、この世界に地の塩、世の光として働き、神の国を宣べ伝える群れとして整えられていくのです。そうしてこそ、私達教会は、「皇帝のものは皇帝に、神のものを神に返す」という主の言葉の担い手となれるのです。私達は小さな群れですが、主の言葉を担う者たちを天の父なる神は大いに喜んでくださいます。

神に背き自分たちの思いに生きて、神さえも殺そうとする私たちを、再びご自身のものとする為に、御子と御霊をお与え下さる父なる神を賛美します。今日から始まる七日の旅路、神のものを神にささげ返す喜びに歩むことができますように、祈ってやみません。